

野の仏ほとけ

武田静山たけだ せいざん

紅襖色こうおういろはあ襖せぬ路歧ろぎのほとけ仏ぼとけ

頭上づじょうのせきてい赤と蜓また飛きたんでまた赤きた来きた

合掌がっしょうのそんじょう村童かしょう歌唱すして過ぐ

慈顔じがん語かたるがごと如そうく蒼苔さい上じょう坐ざす

【作者】武田静山(一九二二〜一九八三年)(大正元年〜昭和五十八年)・内科医 現代漢詩作家 名は昌俊 山形県の人。昭和十年 岩手医専(現・岩手医科大学)を卒業後、現役の軍医として北支駐屯軍に勤務、除隊後も二回応召、軍医大尉として活躍、勲五等瑞宝章を賜わる。終戦後は山形市に内科・静山堂を開業。地域医療に尽くす傍ら本格的な作詩活動を始め、その数は六〇〇首以上に及んだ。昭和五十年社会福祉事業功労者として表彰され、昭和五十八年七十歳で没した。「岳精流吟魂碑除幕式を祝す」(続天三四)など多くの作詩を通じ岳精流日本吟院にも貢献され、顧問も務められた。

【語釈】\*野の仏…石地藏 \*紅…赤い涎かけ \*路歧…路かど \*赤蜓…赤蜻蛉 \*蒼苔…緑の苔

【通釈】赤い涎かけも、色あせた路かどの石地藏、頭の上には赤蜻蛉が飛んでいる。村の童達が手を合わせ童謡を歌いながら去って行った。地藏の優しい顔が語りかけるように蒼い苔の上に座っている。